

## 活動状況報告（12月）

スポーツコース 5期生 太田 ゆき菜

アメリカに来て4ヶ月、大学は12月で秋のセメスターが終了し、ウインターブレイクに入るので、一区切りです。今月は①車いすバスケットボールチームの遠征、②障がいを持った子供達を対象にしたクリスマスパーティー、③日常の様子についてレポートします。

①私が留学しているイリノイ大学には Wheelchair track team と Wheelchair basketball team の2種目がアダプティブスポーツプログラムとして存在します。どちらのチームも伝統のある一流のチームであり、プロのコーチたちが指導をしています。

イリノイ大学はアメリカの大学で初めて車いすバスケットボールチームを設立した大学であり、北米の車いすバスケットボールを統括する組織、NWBA (National Wheelchair Basketball Association) を創設したのもイリノイ大学の人です。そんな伝統のあるチームですが、選手は男女合わせてそこまで多くありません。イリノイ大学は世界大学ランキングでは京大の上をいくような大学なので、勉強自体も難しく、大学に入れる選手もそこまで多くないとのこと。現に今月の大会も大学の成績が思わしくなく、大会の出場権が与えられない選手もいました。しかし、ここでは障がいの有無に関わらず、自分の努力次第でスポーツとアカデミック双方のキャリアを構築できる環境があり、このことをイリノイのチームはとても大切にしている、私もものすごく大切な要素であると改めて痛感しています。今月はウィスコンシンで行われたカレッジトーナメントに帯同しました。今大会、男子チームは4戦全勝と良いシーズンスタートがきれました。車いすバスケは障がいの状態により選手に点数がつけられクラス分けされるのですが、それぞれのクラスによってコート内でのプレーの役割があり、それを各選手がしっかり認識し、徹底することでチームとしてうまく機能できていたように感じました。そして文字で伝えるのは難しいですが、カレッジスポーツの熱量、チーム感、めちゃくちゃいいです！数年間という限られた期間を大学生活と競技生活に没頭できる経験は人生においてもものすごく貴重な時間となり彼らの人生のベースを作っていくものになると感じます。日本ではこのようなパラスポーツのカレッジトーナメントはまだ存在しません。長期的に考えるとないなら日本に作るというのが一つの方法ですが、その一方で、ないならその環境を求めて海外にチャレンジするというのも一つの方法だと感じます。今後本気でパラアスリート student としてアメリカのカレッジスポーツに挑戦してみたい若者がいたら少しでも力になればなと思いますし、そのためにも現地での繋がりを地道に作っておきたいなと思います。バスケットボールチームはここから3月の Nationals (全米選手権) に向けて個々、そしてチーム力の向上を図っていきます。来月はアラバマでの大会に帯同する予定です。

②イリノイ大学の車いすスポーツチームが中心となって、地域の障がいを持った子供達とその家族を対象に毎年行われているクリスマスパーティーに参加しました。選手たちがクリスマスにちなんだゲームや工作などの各ブースを担当し、手作り感溢れるアットホームな雰囲気でした。日本でもすぐに出来そうなアイデアもたくさんとても参考になりました。私はペットボトル花瓶作りのブースを担当しましたが、花瓶作りを行う中で障がいを持った子供達に対して家族がどのようにサポートしているかなどアメリカの実際の様子をたくさん見ることができ、非常に興味深かったです。今回は知的障がいの子供が多かったのですが、気長に待ちながら子供の好きなように見守る親もいれば、こんな感じに作りなさいと全てを指示し、最終的には親が作って子供

は見てるだけになっていた家庭もあったり、結論から言うと親の対応もそれぞれで、子供と一緒に楽しんでいる親御さんもいれば、すごく疲れてピリピリしている親御さんもいました。また、お母さんと子供をロープで繋いでいる親子も何組か見かけました。言葉を話すのが難しいダウン症のお子さんはお母さんといくつかの合図を決めていて、その合図で集中したり、気持ちを切り替えたり、終わりだよを意味したり、日本の小児病院のリハでも使われていたような方法がとられていました。アメリカは日本よりも放任主義かと思っていましたが、意外とそうではなくて、ただ他の家庭と自分の子供を比べたり、周りの親子や人の目、体裁を気にしたりというよりは、自分の子供に全てをフォーカスしていて、それぞれの家庭が我が道を行っているような印象を受けました。あくまで私が感じた印象なので、本当に家庭によって色々だとは思いますが、子供のもつ特性が疾患名で一括りにはできず、それぞれであることは日本とアメリカでも変わりなく、それぞれにフィットした形を一緒に見つけていくことが大切だと改めて感じました。

また、パーティーの前日には様々な人たちからネットのショッピングサイトを介して送られてきた大量のクリスマスプレゼントを車いすスポーツチームみんなでラッピングしました。ものすごい量のプレゼントが集まり、アメリカのドネート文化の強さが垣間見れました。今回のプレゼントもそうですが、アメリカはドネートの文化が強いです。どのスポーツクラブや組織のウェブサイトに行っても必ずと言っていいほどにドネートとボランティア募集のページがあります。そしてサイトからクリックするだけで手間をかけずに簡単に寄付できる仕組みが整っています。ドネートを目的としたアダプティブスポーツイベントも多く開催されています。また、実際に車いすバスケットボールの連盟とのやり取りでも経験しましたが、講習に参加するための宿泊施設は各自で用意して下さいと書かれていたにも関わらず、組織の担当者が親切に連絡をくれて、やり取りを進める中で参加しやすいように参加者用の宿をまとめて連盟で用意してくれました。その時に、もし可能であれば、組織に善意で寄付をして下さい。寄付しなくても宿はちゃんと利用できますよ、あなたの善意にお任せしますというような連絡を受けました。このようにアメリカではドネート文化が根付いていることを日々体感しますし、これらはパラスポーツ組織の資金源の一部となり、組織の運営に影響を与えていることも伺えます。

③12月はセメスターの区切りなのでウインターブレイク前はイベントも多めでした。車いすバスケットチームの選手がチームを組んで戦う伝統的な車いすフットボールの fun game に選手として参加したり、チームの family dinner (アメリカではチーム愛が本当に強くて、チームメイト、スタッフを“family”ととても大切にします)に参加したり、車いす陸上チームの VR 大会に参加したり、ホームパーティーに参加したり。平日はリハ室兼ジムで選手のトレーニングのサポートを行いました。また、バスケットチームは完全に OFF なのでトラックチームの練習に参加し、実際にレーサーを借りることに成功したので毎朝必ず 10 マイル (16 キロ) 以上多いときは 25 キロ近く走ることを継続しています。いずれ北海道の車いすトラックをやりたい子供達的环境を整えたいと思い、トラックに関して無知なので、実際に自分がプレーをしながら学んでいます。車いすトラックのコーチからは競技中に使用するグローブの作り方を教えてもらい、3D プリンターを使って自分のものをコーチと一緒に作ったり、開発中の VR とローラーを使った室内トレーニングの実験台になったり、毎日多くの経験をすることができています。

年が明けると車いすバスケットチームの集中練習期間が始まり、その後、春のセメスターがスタートし、通常の授業と練習の日々に戻ります。また週末はバスケットチームのアラバマでの大会の帯同や NWBA のクラス分けコースの受講、ジュニアの車いすトラックキャンプの帯同など楽しみなイベントも多く、充実した時間を過ごせるようにしっかり準備をして望みたいと思います。

